

# 性差から見た殺人形態の分析

○鈴木隆徳

(神奈川県警察科学捜査研究所)

Key words: 殺人, 性差, 集団化

## 目的

日本における殺人事件は、加害者の約 80%, 被害者の約 60% が男性(田村, 1983)であり、加害者、被害者とも男性が圧倒的に多い犯罪であるが、女性加害者の比率は窃盗、放火、賭博、偽造に次いで多く、殺人は女性が起こしやすい犯罪の一つとも言える。殺人行動に関して、性差がどのような影響を与えるかを検討するため、本研究では神奈川県警察で検挙された殺人事件をもとに、殺人における性差について分析した。

## 方法

**データ:** 2001 年から 2003 年の 3 年間に神奈川県警察で検挙された既遂、未遂を含む殺人事件 270 件。被害者 1 人に対して加害者が複数の事件、加害者 1 人で被害者が複数の事件等があるため、件数と加害者人数、被害者人数は異なり、対象となった加害者は 339 人、被害者 286 人であった。また、男性加害者は 282 人、女性加害者は 57 人であった。

**調査内容:** 各事件の資料を元に、加害者年齢、加害者と被害者の面識の有無及びその関係、使用した凶器、犯行動機について分析した結果を報告する。

## 結果と考察

**加害者年齢:** 加害者の年齢に 5 年を単位とした段階を設定したところ、10 代、30 代前半、50 代後半、70 代後半にピークが見られ、10 代、70 代後半を除けば、この分布形態は神奈川県内の年齢構造の分布と酷似していた。同県の各年代の人口から、10 万人あたりの加害者率を求めたところ、男女とも、40 代後半以降でそれ以前と比較して加害者率が低く、70 代後半で再び高くなっているが、男性では、50 代後半も加害者率が若干高くなっていた。また、男性では、10 代の加害者率が極端に高くなっている。一方、10 代女性は他の年代の女性と比較しても加害者率は高くなく、10 代における男女差が特に顕著であった。10 代男性の多くは、抗争やリンチ等で共犯として加害者となっており、集団化の影響が見られた。女性では各年代とも、集団による抗争やリンチはほぼ見られず、集団化は男性、特に 10 代や 20 代前半の低年齢層で特徴的なものであった (Fig.1)。

**加害者と被害者の面識の有無及びその関係:** 男性加害者では 52.1% が被害者と面識があったのに対し、女性では 89.5% で面識を有していた。加害者と被害者の関係を親族(親子、兄弟姉妹、祖父母、孫等)、恋愛関係((元)夫婦、(元)恋人、内縁等)、友人・知人(同僚、雇用関係等)、一時的接触(店員と客、対立関係のトラブル等)、その他に分類すると、女性は親族(45.6%)、恋愛関係(29.8%)が多いが、男性では一時的接触(25.9%)、友人・知人(17.4%)が多くなっていた。男性は外出先での他者とのトラブル等から殺人に到る外向的殺人、女性では非常に身近な相手に対する内向的殺人の傾向が明らかになった。

**凶器:** 女性(52.6%)、男性(47.2%)とも刃物が最も多く使われている。入手の容易さに対して、殺傷能力が高く威嚇にも用いることができる等、非力な女性でも使用しやすいことも刃物がよく用いられる一因と考えられる。2 番目に使用頻度が高いのは、女性では紐類(17.5%)、男性は棒状の物(18.1%)となっており、男性では集団による抗争等の影響と思われた。また、男性では、銃器(5.3%)、車両(5.7%)、爆発物(1.4%)等が用いられているが、女性では用いられておらず、男性特有であ

る。車両に関しては、刃物等と異なり、それを凶器として直接的に使用する、つまり、殺意を持って轢殺するのではなく、交通上の違反やトラブル等で警察官や相手から逃走する際に、取りすがる人を振り落とすという形で用いられることが多い。近年、女性も日常的に車両を使用しているが、男性と異なり、女性はそのようなトラブル等に遭遇する機会が少ないか、あるいは遭遇しても車両を衝突させたり、人を振り落としたりしてまで逃走しようとはしないようである。

**動機:** 男性加害者の約 2 割が些細なトラブルから殺人に発展しているが、女性ではわずか 1.6% である。また、口論が男性は 8.5%、女性が 3.5% であり、男性はトラブルや口論等の些細な原因から殺人に到る傾向が見られた。女性では男女問題に端を発した殺人が最も多く(12.3%)、男性でも 2 番目に多い動機である。前述した逮捕回避(3.2%)は男性特有の殺人形態であり、いわゆる育児ノイローゼ(7.0%)は女性に特有である。

**総合考察:** 男性は集団で殺人に関係する傾向が高く、犯行に『加担』した加害者は 50 代前半までの各年代に存在しており、特に 10 代から 20 代前半の若年層で顕著である。また、トラブルや口論に端を発した殺人は男性のほぼすべての年代で見られたが、女性ではほとんど見られず、男性は些細な動機あるいは原因から関係性の薄い相手に対して殺人行為を行ないやすいことが示唆された。一方、女性は関係性の高い相手に対する殺人の傾向が強い。逮捕回避は 30 代後半までの男性だけに見られた行動で、相手を傷つけても逃走を図ろうとする行為は若い男性に特に強く見られる特徴であるかもしれない。本分析では、男性加害者の集団化傾向、短絡的な犯行が特に注目された。

## 引用文献

田村雅幸(1983).最近の 30 年間における殺人形態の変化 科警研報告犯少年編, 24, 33-45.

(SUZUKI Takanori)

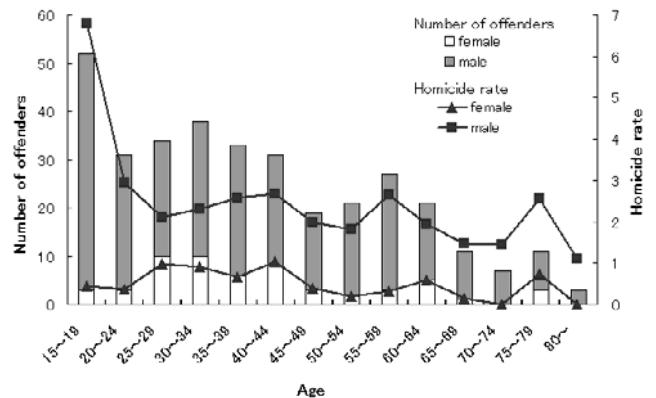


Fig.1 Offenders per 100,000 inhabitants a year.